

## 現職者のキャリア形成における日本語教育リカレントコースの意義と課題

— 修了生を対象とした追跡調査をもとに —

工藤嘉名子・伊東克洋

キーワード：日本語教育リカレントコース、博士前期課程、現職日本語教員、修了生追跡調査、キャリア形成

### 1. はじめに

日本語教育リカレントコースは、東京外国語大学（以下「本学」）の大学院総合国際学研究科博士前期課程の国際日本専攻の1コースで、国内外の現職日本語教員を対象とした日本語教育専門のコースである。同じ国際日本専攻の国際日本コースが4月入学で標準修業年限が2年であるのに対し、日本語教育リカレントコースは10月入学で標準修業年限は1年である。修業年限は1年であるが、実際には正味9か月半で修了要件の30単位以上の単位を修得し、修士論文または修士研究<sup>1</sup>を完成させなければならない。

このような現職の日本語教員を対象とした1年制の修士課程のプログラムは、国際交流基金日本語国際センターと政策研究大学院大学との連携プログラムである「日本語教育指導者養成プログラム（修士課程）<sup>2</sup>」があったが、2019年9月に終了している（八田・菊岡 2020）。そのため、現時点で日本語教育を専門領域とした現職教員のための1年制の修士課程のプログラムは、日本国内では本学の日本語教育リカレントコースのみである。

本コースでは、2016年10月にコースが開設されて以来、2023年9月までの7年間で、1期生から7期生までの入学者計24名全員が修士論文を完成させ、1年間の課程を修了している。開設から7年経ち、一定数の修了生を出すことができた今、修了生の声を聞くことは重要であると考えられる。そこで、筆者ら<sup>3</sup>は、現職日本語教員のキャリア形成という観点から日本語教育リカレントコースの意義と課題を明らかにすることを目的として、修了生を対象とした追跡調査（アンケート調査）を実施した。

本稿では、まず、日本語教育リカレントコースの概要とこれまでの実績について報告する（第2節）。次に、修了生を対象とした追跡調査の概要を報告し（第3節）、調査結果の概要について報告する（第4節）。そして、調査結果に基づき、現職者のキャリア形成における本コースの意義

<sup>1</sup> 翻訳や用例集といった、論文という形式に収まらない成果物に基づく研究成果を指す。日本語教育リカレントコースでは、教科書やカリキュラムの開発などが修士研究に該当するが、過去に修士研究で課程を修了した事例はない。

<sup>2</sup> 「日本語教育指導者養成プログラム」は、2001年～2008年までは国際交流基金日本語国際センターと政策研究大学院大学、国立国語研究所の3機関の連携だったが、2009年からは2機関の連携となった。海外の非日本語母語話者の現職者を対象としたプログラムで、33単位以上の科目単位修得と修士論文に代わる「特定課題研究」を修了要件として課している（近藤・木屋・木田 2012、八田・菊岡 2020）。

<sup>3</sup> 工藤・伊東は、日本語教育リカレントコースの現運営委員である。

と課題について考察する（第5節）。

## 2. 日本語教育リカレントコースの概要

### 2.1 日本語教育リカレントコースの目的と対象

日本語教育リカレントコースは、現職の日本語教員を対象としたコースで、本学で1年間勉学・研究に専念して修士号（言語学修士または学術修士）を取得したのち、所属機関に戻って日本語教育の発展に貢献できる人材を育成することを目的としている。具体的には、1) 日本語学科、日本語コース等のコースデザイン策定ができる、2) 機関に適した日本語教材の開発ができる、3) 多様なニーズに応えられる応用実践力を備える、4) キャリアアップを目指し、理論知識を深め、研究能力を高めることをディプロマ・ポリシーとしている<sup>4</sup>。

対象者は日本国内外で日本語を教えている現職の日本語教員で、定員数は6名である。学生募集要項では、出願要件として、1) 出願時において通算3年以上の日本語教育経験を有する者、2) 出願時において日本国内外の日本語教育機関に所属する現職日本語教員である者、3) 本学に在籍する期間は勉学・研究に専念できる者、これら3つの要件を全て満たす必要があるとしている。志願者の国籍や母語は問わないが、日本語を母語としない志願者の場合は、日本語能力試験N2（または旧2級）合格以上の日本語能力が求められる。なお、日本語教育リカレントコースは、開始当初は日本国外の現職者を対象としていたが、2019年10月入学の4期生以降は日本国内の現職者にも門戸が開かれている。

日本語教育リカレントコースの入試方法は、アドミッション・ポリシー<sup>5</sup>にある通り、書類審査と口述試験により、研究遂行能力および適性や意欲を総合的に判定するというものである。入試の際に提出が求められる書類は、1) 研究計画書、2) 志願票（履歴書）、3) 所属長の推薦書、4) 志願理由書、5) 日本語教育歴、6) 日本語能力証明書（N2以上）である。現職者を対象としたコースであるため、所属長の推薦書と日本語教育歴の提出を課している。また、正味9か月半で研究を遂行できる水準の研究計画が求められる。

### 2.2 日本語教育リカレントコースのカリキュラム

日本語教育リカレントコースでは、必修の「修士論文修士研究ゼミ」4単位を含む「専攻科目」20単位、「専攻関連科目」10単位の合計30単位以上の単位を修得し、修士論文等の審査および最終試験に合格することを修了要件としている（表1参照）。「専攻科目」は国際日本コースと共通

表1 日本語教育リカレントコースの修了要件

科目区分	単位数	科目履修要件
専攻科目	4単位必修	修士論文修士研究ゼミ
	16単位	国際日本専攻内の専攻科目から選択必修
専攻関連科目	10単位	研究科共通科目、世界言語社会専攻、学部の授業科目から10単位まで
	合計30単位以上	

（「総合国際学研究科履修案内2023年度入学者用」p.14より抜粋）

<sup>4</sup> 東京外国語大学「日本語教育リカレントコース（博士前期課程 国際日本専攻）」より  
（<https://www.tufs.ac.jp/education/pg/master/recurrent-jpedu.html>）2023年11月20閲覧

<sup>5</sup> 同上

で、必修の「修士論文修士研究ゼミ」のほか、「日本語学研究<sup>6</sup>」「日本語教育学研究」「対照日本語研究」「日本語教育実践研究」「発信日本語演習」「発信英語演習」などの授業科目がある。「専攻関連科目」の単位には、国際日本専攻の専攻科目のほか、「多文化コーディネーション研究」などの研究科共通科目や世界言語社会専攻の授業科目、学部の授業科目の修得単位を、10単位を上限として充てることができる。

日本語教育リカレントコースの学生（以下「リカレント生」）の場合、学則では「必修」ではないが履修を義務づけている専攻科目が3科目ある。いずれも日本語教育リカレントコース運営担当教員が開講している科目で、リカレント生のみ受講可能である。このうち、「日本語教育実践研究（現職日本語教員のための日本語教育実習研究）」は、秋学期に開講される2単位の専攻科目で、本学の全学日本語プログラム<sup>7</sup>でのインターンシップを行う実習科目である。「発信日本語演習（現職日本語教員のための研究リテラシー）」は、秋・春学期に開講される各1単位の専攻科目で、通称「リカレント生のゼミ」と呼ばれる。この授業では、修士論文完成までのロードマップに沿って各自の研究の進捗状況を報告し、互いに意見交換しながら、計画的かつ着実に修士論文を執筆していくことを目的としている。

リカレント生の場合、10月に入学して翌年の7月中旬に修士論文を提出しなければならない。実質的に秋学期・冬学期（集中講義）・春学期の3学期で30単位以上の単位を修得しなければならない。そのため、履修登録にあたっては、主任指導教員およびリカレントコース担当教員と相談の上、無理のない履修計画を立てるよう指導している。

### 2.3 コースの実績

日本語教育リカレントコースの受け入れが始まった2016年10月から2023年11月現在で、1期生から8期生までの計26名が本コースに入学し、7期生までの計24名が修了している。各年度の学生数および国籍・地域の内訳は表2の通りである。国籍・地域は、学生数の多いものから国名の50音順に示す。

表2 日本語教育リカレントコースの学生数

期	入学年度	学生数 (留学生)	国籍・地域 (学生数)
1期	2016年度	5 (4)	カンボジア (1)、タイ (1)、日本 (1)、マレーシア (1)、モンゴル (1)
2期	2017年度	5 (2)	日本 (3)、タイ (1)、マレーシア (1)
3期	2018年度	4 (4)	スリランカ (1)、タイ (1)、ベトナム (1)、マレーシア (1)
4期	2019年度	4 (1)	日本 (3)、ベトナム (1)
5期	2020年度	2 (1)	日本 (1)、ベトナム (1)
6期	2021年度	0 (0)	
7期	2022年度	4 (3)	ベトナム (2)、スリランカ (1)、日本 (1)
8期	2023年度	2 (1)	日本 (1)、ベトナム (1)
学生数合計		26 (16)	日本 (10)、ベトナム (6)、タイ (3)、マレーシア (3)、スリランカ (2)、カンボジア (1)、モンゴル (1)

<sup>6</sup> 実際の授業科目名には「日本語学研究1・2」のように枝番が付いているが、本稿では、枝番は省略する。

<sup>7</sup> 本学で学ぶ多様な留学生のための日本語教育プログラムで、初級1から上級2までの7レベルが設置されている。インターンシップでは、主に初級から中級レベルの総合日本語科目の専任担当の授業に週1コマ参加し、実地研修を行っている。

表2に見るように、2016年度～2019年度の学生数は4～5名で、定員数6名の3分の2以上の学生数を維持してきたものの、2020年度以降は、定員の半数を割る年も多くなっている。特に2021年度は、コロナ禍で先行きが不透明であったことも影響したためか、学生数は0となっている。このような状況から、日本語教育リカレントコースでは、コース発足以来、安定的な学生数の確保が課題となっている。

学生の国籍・地域を見ると、日本が10名と最も多いが、このうち日本国内の現職者は、国内在住者に門戸が開かれた2019年度以降の入学者6名中3名で、それ以外の7名は海外（当時インド、マレーシア、ドイツ）の現職者である。一方、留学生の出身国・地域は全てアジア圏（東南アジア・南アジア・中央アジア）で、ベトナムが6名と最も多く、タイ、マレーシアと続いている。

2023年9月までに修了した学生24名は、全員修士論文を提出して最終審査に合格している。修士論文のテーマは、「語彙学習」「言語学習ビリーフ／ストラテジー」「口頭訂正フィードバック」「学習動機」「教師協働」「教員養成」など、多岐にわたっている。いずれの論文も、現職者ならではの明確な問題意識に裏付けられ、研究成果を自身の教育現場のみならず国・地域の日本語教育にも広く還元できる内容である。修了生の修士論文の中には、本学の修士論文推薦公開制度により、公開に値する優れた研究成果として、機関リポジトリである「東京外国語大学学術成果コレクション」に収められた論文（内山2021）<sup>8</sup>もある。

さらに、制度が導入された2017年度以降に入学した2期生以降の修了生19名中18名が所定の履修科目数および成績の要件を満たし、「専門領域単位修得証明書（日本語教育）」を取得している。うち3名は「キャリアプログラム修了証（多文化コーディネーター養成プログラム）」も同時に取得している。

以上、日本語教育リカレントコースの概要について説明し、これまでの実績を振り返った。リカレント生の場合、9月修了で人数も少ないこともあり、大学で実施している授業評価アンケートや生活意識調査、大学院満足度調査等の結果からリカレント生の学びの実態や困難点、要望といったことを読み取ることは難しい。また、これまで一部の修了生の動向についてはインフォーマルに伝わってきてはいるものの、コース全体として、リカレント生が修了後にどのような道を歩んでいるのか、本コースがリカレント生のキャリア形成にとってどのような意味を持っているのかといったことも把握できていない。そこで、修了生を対象とした追跡調査（アンケート調査）を実施することにした。

### 3. 修了生を対象とした追跡調査の概要

#### 3.1 調査の目的と対象

今回の追跡調査の目的は、日本語教育リカレントコースの修了生に、入学前（主に就願時）・在学中・修了後の状況を時系列に振り返ってもらい、1) 現職日本語教員のキャリア形成という観点からの本コースの意義と課題を明らかにすること、2) 今後のコース改善の手がかりとなる情報を得ること、という2つである。本稿では、1) について報告する。

<sup>8</sup> 修士論文推薦公開制度は、公開に値する優れた修士論文・修士研究でありながら、修了生の進路（博士後期課程に進学しないなど）によっては世に出ることなく埋もれてしまう学術成果を推薦・公開する制度で、2021年3月修了の学生から運用が開始されている。

調査の対象は、2016年10月から2023年9月に日本語教育リカレントコースに在籍した1期生から7期生までの修了生計24名である。各期の学生数および国籍・地域の内訳は、前述の表2の通りである。

ここで、本稿での「キャリア形成」について定義しておく。文部科学省中央教育審議会（2011）の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方（平成23年1月31日）」では、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが『キャリア』の意味するところである」（p.17）としている。こうした「キャリア」の考え方を踏まえ、本稿では、仕事や職業を通してだけでなく、生涯の中で人や社会と関わりながら様々なことを学び、「自らの生き方」を作り上げていく過程を「キャリア形成」とする。

### 3.2 調査の方法

調査は、2023年9月下旬～10月中旬にかけて、Google フォームへの回答という形で実施した。調査対象者である修了生には、調査の趣旨・目的とデータ利用に関する約束事を読み、調査への協力を承諾した上で、回答してもらった。本調査への調査は記名式で、選択肢項目と自由記述項目の組み合わせである。調査は、「Ⅰ. 入学前（主に出願時）のこと」「Ⅱ. 在学中のこと」「Ⅲ. 修了後のこと」という時系列に設定した3つのセクションで構成され、質問項目は計43項目であった。これら調査項目の中には、本コースでの勉学・研究の実態や現職者のキャリア形成に関わる項目だけではなく、出願の際の情報入手先や奨学金等の利用状況、コースの課題・改善点といった、コース改善のための項目も含まれている。

### 3.3 回答者数

修了生24名中23名から回答を得た。これは日本語教育リカレントコースの修了生ほぼ全員、つまり調査対象者の母集団とほぼ等しい回答者数であり、修了生の動向や意向の全体像を把握するのに十分な回答数であると言える<sup>9</sup>。

## 4. 調査結果の概要

本稿では、修了生のキャリア形成に関わる質問項目を分析対象とし、1) 入学前（主に出願時）、2) 在学中、3) 修了後の順に結果を見ていく。なお、選択肢回答の項目については、在学当時を基点として、便宜的に「日本人学生」と「留学生」に分け、グラフの形で結果を示す。また、「Q I-1」のような項目番号は、「セクション番号+質問項目番号」である。

### 4.1 入学前（主に出願時）の状況

ここでは、修了生が出願時においてどのような教育経験を持っていたのかについて、①出願時の所属機関および職位・肩書き、②雇用形態、③日本語教育年数の順に報告する。

<sup>9</sup> リカレント生の場合、同期生のネットワークでのつながりがあり、修了生同士でも調査への協力を呼びかけてくれたことも、これだけの回答者数が得られた要因であると考えられる。

#### 4.1.1 出願時の教育経験

まず、出願時の所属機関（国内外の別・機関別）および職位・肩書きについて、集計結果を表3に示す。これらは、テキスト入力形式の回答をもとに集計したものである。出願時の所属機関を見ると、日本国外からの応募が20名と圧倒的に多い。機関別では、大学（予備教育課程含む）が15名と最も多く、次いで、日本語学校（5）、財団・法人機関（3）の順となっている。職位・肩書きでは、専任・常勤講師／教師が16名、非常勤講師が4名、学科長・主任・教育マネージャーなど統括的な立場にある者が3名となっている。

表3 出願時の所属機関および職位（ ）は人数 [n=23]

Q I-1 出願時の所属機関	日本国外（20）、日本国内（3）
	大学（15）、日本語学校（5）、財団・法人機関（3）
Q I-3 職位・肩書き	専任・常勤講師／教師（16）、非常勤講師（4）、学科長・主任など（3）

次に、図1に常勤・非常勤の雇用形態別の結果を示す。出願時の雇用形態を見ると、「常勤（任期あり）」が留学生を中心に11名、「常勤（任期なし）」が8名、非常勤が4名と、圧倒的に常勤が多い。また、図2の「出願時における日本語教育年数」では、「3年以上5年未満」が10名、「5年以上10年未満」が8名と「10年未満」が多い一方、出願時で10年以上の長い教育経験を持つ者も5名となっている。

これらの結果から、出願時において、修了生の大多数が日本国外の高等教育機関に常勤として勤務し、出願要件である「3年以上の日本語教育経験」を大きく上回る教育経験を有していたことがわかる。

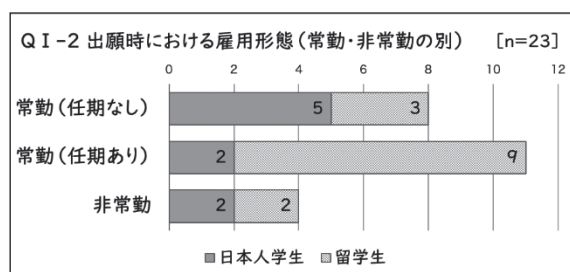


図1 出願時における雇用形態

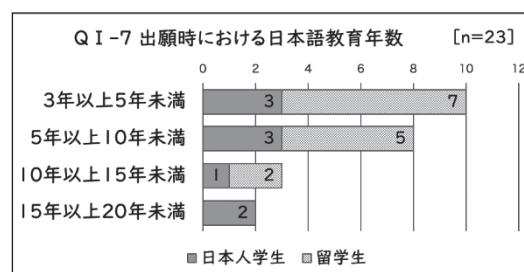


図2 出願時における日本語教育年数

#### 4.1.2 大学（学部）での専攻

学部での専攻と卒業論文執筆経験の有無を表4に示す。日本語・日本文化・日本文学専攻が9名（うち留学生8名）、日本語教育専攻が5名（うち留学生2名）など、日本語・日本語教育関連の専攻が多いが、機械工学や電子情報工学などの工学系の専攻<sup>10</sup>もいる。

表4 大学（学部）の専攻（ ）は人数 [n=23]

Q I-5 学部での専攻	日本語・日本文化・日本文学（9）、日本語教育（5）、その他の言語・言語学（3）、工学（3）、その他（3）
--------------	--

<sup>10</sup> 工学系専攻3名は、日本国内の4年制大学を卒業した留学生で、大学等の予備教育課程の教員である。

また、学部での専攻に関連して、卒業論文執筆経験の有無についても尋ねたところ、図3のような結果が得られた。卒業論文執筆経験「あり（日本語）」が16名、「あり（日本語以外の言語）」が2名となっており、修了生の大半は卒業論文を執筆した経験がある一方で、卒業論文を書いた経験のない者も5名となっている。

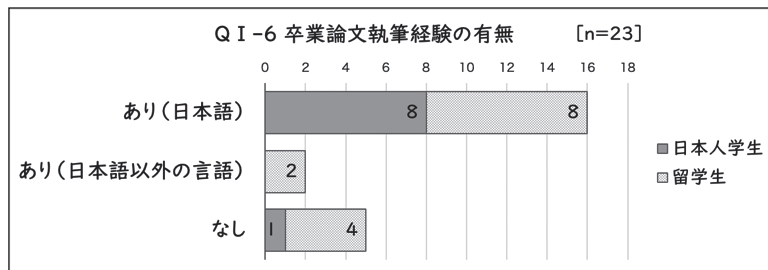


図3 卒業論文執筆経験の有無

#### 4.1.3 出願時における留学生の日本語能力

出願時における留学生の日本語能力は、JLPTのN1(旧1級)合格以上が14名中9名、N2合格相当が5名である(図4)。N1合格以上の高い日本語能力を有している者が多い一方で、N2合格相当の者も一定数いる。

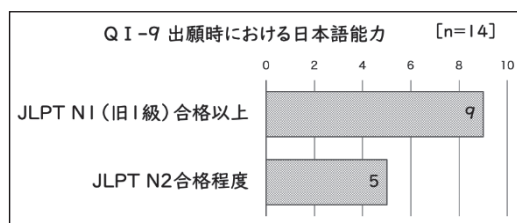


図4 出願時における留学生の日本語能力

#### 4.1.4 志望理由

本学の日本語教育リカレントコースを志望した理由(Q I-10 自由記述)としては、「日本語教育(実践)に関する知識を深めたい」「学び直しがしたい」「現場の問題を研究によって解決したい」「研究能力を高めたい」といった勉学・研究に関わる学習動機のほか、「大学で常勤職を得るために修士号が必要」「修士号を取得してキャリアアップしたい」などの自身のキャリアにおける必要性、「1年で修士号が取れ、現場に早く現場に戻れる」「1年であれば休職できる」といった1年制であることのメリットなどが挙げられている。

#### 4.1.5 出願にあたっての検討事項および心配ごと・悩み

出願を考えるにあたり、「2年制の修士課程への進学についても検討したか」「将来的に博士課程への進学を考えていたか」「心配だったことや悩んだことはあるか」という質問への回答をそれぞれ図5・図6・図7に示す。

まず、出願を考えるにあたって、「2年制の修士課程への進学についても検討したか」という問いに対しては、「検討した」が6名、「しなかった」が17名である(図5)。検討したが本コースを選択した理由としては、「長期間、家族(子ども)から離れられない」「早く現場に復帰したい」「1年なら学費の工面ができる」などの回答があった。

次に、「将来的に博士課程への進学を考えていたか」という質問に対して、「考えていた」が10名で、「考えていなかった」が13名であった(図6)。「考えていた」と回答した10名中9名は留学生で、留学生の6割以上が当時、博士課程への進学を視野に入れて進路選択をしていたことがわかる。

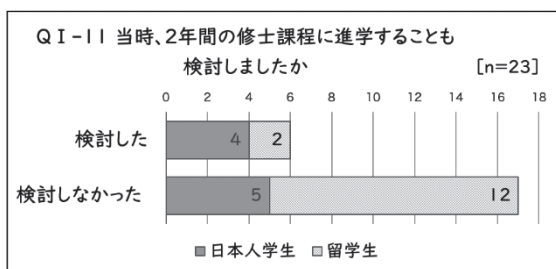


図5 2年制の修士課程への進学に関する検討

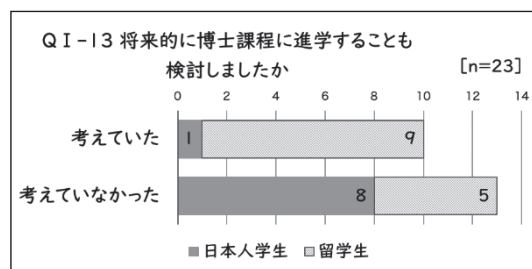


図6 博士課程への進学に関する検討

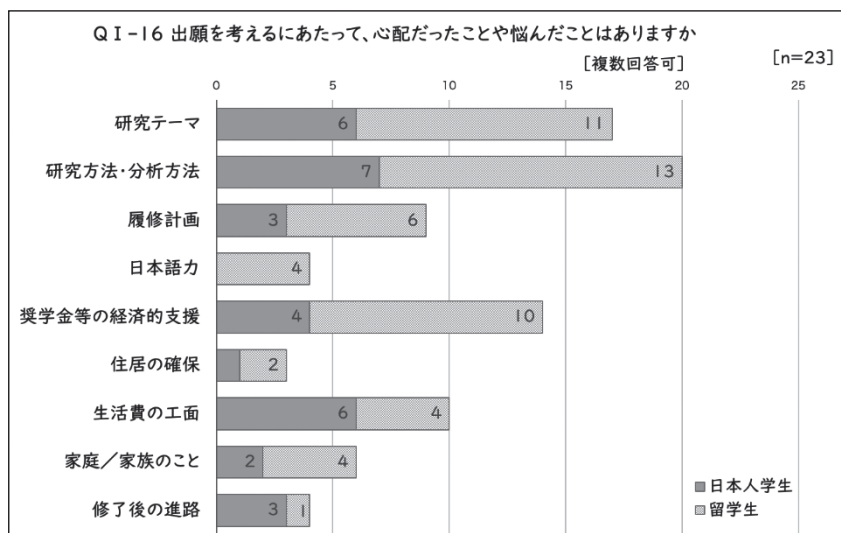


図7 出願を考えるにあたって心配だったこと・悩んだこと

一方、出願を考える際に心配だったことや悩んだこととしては、日本人学生、留学生ともに、「研究方法・分析方法 (20)」「研究テーマ (17)」といった研究面についての心配ごとが最も多い(図7)。次いで、「奨学金等の経済的支援 (14)」「生活費の工面 (10)」などの経済面での心配ごとも多く、特に留学生の場合、奨学金等の経済的支援の有無が出願を考える上で重要な案件となっていることがわかる。また、留学生の中で「日本語力」と回答した4名は、いずれも出願時の日本語能力が「N2合格程度」と回答しており、当時、自身の日本語能力に不安を感じていたことがわかる。

## 4.2 在学中の状況

ここでは、修了生が在学中、どのような状況下で勉学・研究をし、どのような学びを得ていたかという点に焦点を絞り、①入学時(在学中)の所属、②履修状況・授業での学び、③修士論文の執筆の順に報告する。



#### 4.2.1 入学時（在学中）の所属

リカレント生の場合、入学時に離職するケースもあるため、入学時（在学中）の所属について尋ねたところ、「出願時と同じ（休職扱い・在職のまま）」が計15名と、全体の約3分の2であった。一方で、残り3分の1の8名が「所属なし（離職）」と回答しており、一定数の学生が仕事を辞めて本学に進学していたことがわかる。

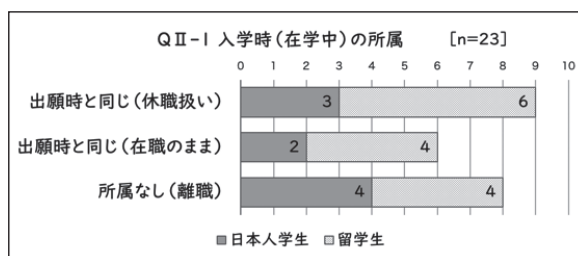


図8 入学時（在学中）の所属

#### 4.2.2 履修状況・授業での学び

まず、履修単位数（履修科目数）を見てみる。リカレント生は、30単位数以上の単位を修得することが修了要件となっているが、実際には、半数近い11名が30単位を越えて履修していたことがわかる（図9）。

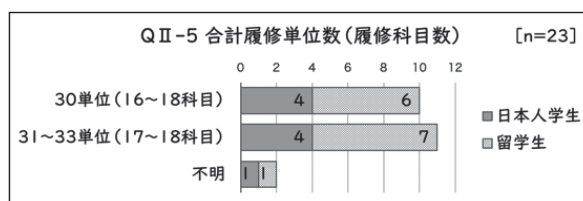


図9 履修単位数（履修科目数）の合計

これに関連して、「1年間で30単位数以上の単位を取得するのは大変だったか」という質問への回答を見ると、「予想よりはるかに大変だった（6）」「やや大変だった（6）」という「大変だった」という回答が多い（図10）。特に、「はるかに大変だった」という回答は留学生に多い<sup>11</sup>。「大変だった」理由としては、「授業の準備や課題と論文執筆を並行して進めるのが大変だった」「コロナ禍でオンライン授業がほとんどで、同期との情報交換ができなかった」などがあつた。一方で、「予想通りだった（8）」という回答が全体では最も多くなっている。その理由としては、「（修了生の先輩や担当教員から）大変さを聞いていた」「入学前に心の準備をしていた」などが挙げられ、入学前の情報収集や情報提供によって、ある程度の心構えができていたことがうかがえる。

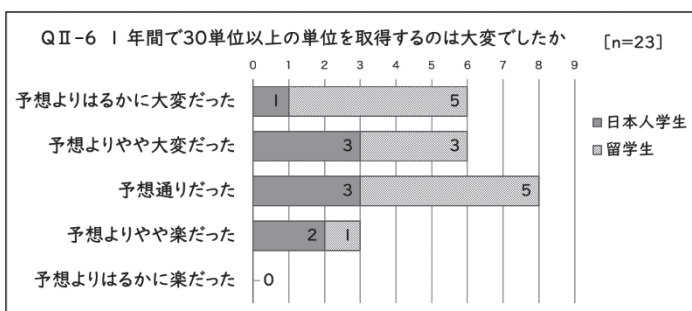


図10 1年間で所定の単位を取得することについて

次に、リカレント生を対象とした「発信日本語演習（通称「リカレント生のゼミ」）」と「日本語教育実践研究（通称「インターンシップ」）」を履修した感想について、図11・12に結果を示す。

<sup>11</sup> 留学生（正規生）の場合、本学のチューター制度が利用できる。2023年9月までに本コースを修了した留学生15名中10名がこの制度を利用し、在学中に日本人大学院生（リカレント生含む）・学部生のサポートを受けている。

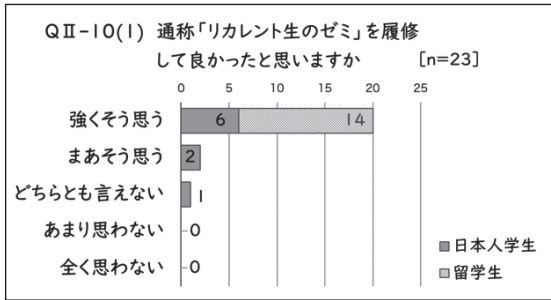


図 11 「リカレント生のゼミ」について

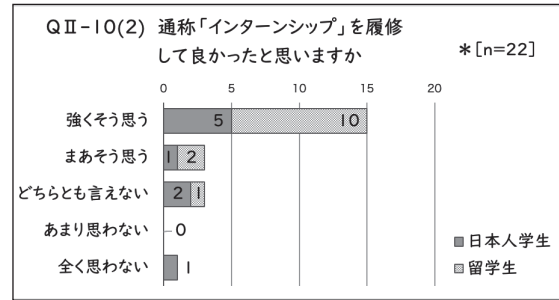


図 12 「インターンシップ」について

「リカレント生のゼミを履修して良かったと思うか」という問いでは、「強く思う (20)」「まあ思う (2)」という回答が圧倒的に多く、留学生は全員「強く思う」と答えている (図 11)。理由としては、「論文執筆の流れや予定が理解できた」「進度の目安となった」「教員や同期生から助言がもられた」「同期生と研究等の情報共有ができた」「互いに励まし合えた」「安心できた」など、ゼミが修士論文を執筆する上でのペースメーカーとなっていただけではなく、学生同士の学び合いや支え合いの場にもなっていたことがうかがえる。

「インターンシップを履修して良かったと思うか」については、この科目を履修した 22 名中 15 名が「強く思う」、3 名が「まあ思う」と、全体的に肯定的であった (図 12)。その理由としては、「実践的なことが学べた」「自身の実践の場と比較しながら学べた」「自分の改善点が学べた」「現在の仕事の役に立っている」といった現職者の視点での回答が多かった。一方で、「希望のクラスに入れなかった」を理由に、「全く思わない」と回答した者もいた。ちなみに、現在では、事前に学生の希望を聞いたうえで研修先を決定している。

#### 4.2.3 修士論文の執筆

まず、正味 9 か月半で修士論文を執筆する上で重要な鍵を握るデータ収集の時期・場所について尋ねたところ、図 13 に見るように、「在学中に一時帰国して所属機関等で (10)」「在学中に日本国内で (7)」と、在学中にデータ収集を行った者が多かった。一方、「入学前に所属機関等で」も 5 名おり、本コースでの勉学・研究を見据えて、入学前から計画的に準備していたことがうかがえる。また、全体的に所属機関等でデータ収集を行った者が多く、データ収集の場を持っている現職者の強みがこの結果に表れている。

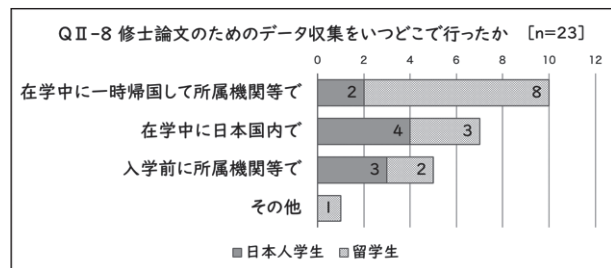


図 13 修士論文のためのデータ収集

次に、「1 年間 (正味 9 か月半) で修士論文を執筆するのは大変だったか」という項目では、「予想よりはるかに大変だった (8)」「やや大変だった (11)」が計 19 名と、「大変だった」という回答が多い。日本人学生は、全員「大変だった」と回答している (図 14)。「大変だった」理由としては、「(データ収集や執筆の) 時間が足りなかった」「1 年間で 2 年分の勉強をしなければならなかった」「膨大なデータをまとめ、論文を執筆するのが想像以上に大変だった」「コロナ禍で予定通りに進まなかった」など、時間的制約だけでなく、コロナ禍という状況も「大変さ」の要因に

なっていたことがうかがえる。

最後に、「修士論文に関して、指導教員から十分な指導や助言を得ることができたか」という項目では、1名<sup>12</sup>を除くほぼ全員が「強く思う(20)」「まあ思う(3)」と回答しており、指導教員からの指導や助言に満足していることがわかる。その理由としては、「毎週1対1で丁寧に指導してもらえた」「丁寧にフィードバックしてもらえた」「最初から最後まで段階を踏んで指導してもらえた」「メールにもすぐに返信してもらえた」などが挙げられ、修了生が指導教員からきめ細かい指導を受けていたことがわかる。

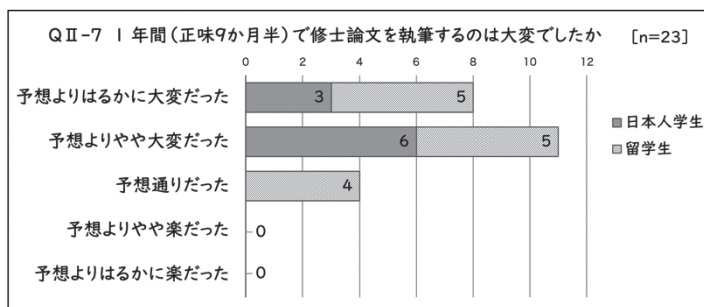


図 14 1年間で修士論文を執筆することについて

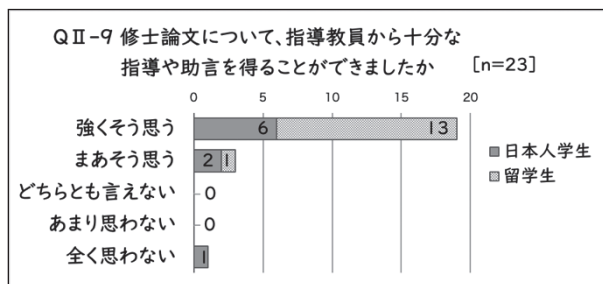


図 15 指導教員からの指導・助言について

### 4.3 修了後の状況

ここでは、修了生たちが修了後にどのような進路を歩んでいるのか、本コースがキャリア形成においてどのような意味を持っているのかということについて、①修了後の経歴、②キャリア形成における本コースの役割の順に結果を報告する。

#### 4.3.1 修了後の経歴

まず、2023年10月現在の所属機関（国内外の別・機関別）および職位・肩書きについて、集計結果を表5に示す。現在の所属機関を見ると、日本国外が15名、国内が8名で、日本国籍の修了生9名中8名が国内で職を得ている。機関別では、大学（予備教育課程含む）が18名と最も多く、大学に勤務する修了生の数は出願時（表3）の15名より増えている。職位・肩書きでは、専任・常勤講師／教師が11名と最も多く、部門長・主幹など統括的な立場にある者（4）、特定研究員・専門員（3）、非常勤講師（2）と続く。

表 5 現在の所属機関および職位（2023年10月現在）

Q III-1 現在の所属機関[n=23]	日本国外（15）、日本国内（8）
	大学（18）、財団・法人機関（2）、日本語学校、企業、未定 <sup>13</sup> （各1）
Q III-3 職位・肩書き [n=22]	専任・常勤講師／教師（11）、部門長・主幹など（4）、特定研究員・専門員（3）、非常勤講師（2）、その他（2）

<sup>12</sup> 複数の要因が絡んでいるが、個人の特定につながる恐れがあるため、理由については言及しない。

<sup>13</sup> 「未定」は、2023年9月に修了し、現在就職活動中の7期生である。

次に、図 16 に常勤・非常勤の雇用形態別の結果を示す。現在の雇用形態を見ると、「常勤（任期あり）」が11名、「常勤（任期なし）」が8名、非常勤が2名と、出願時（図 1）と同様に、常勤が多い。また、2023年9月に修了したばかりの7期生以外について修了後の略歴（QⅢ-4）を見ると、転職や複数の機関を経て現職に至ったという修了生が過半数である。留学生の中には、既に博士課程への進学が決まっている者や進学に向けて準備を進めている者もいる。

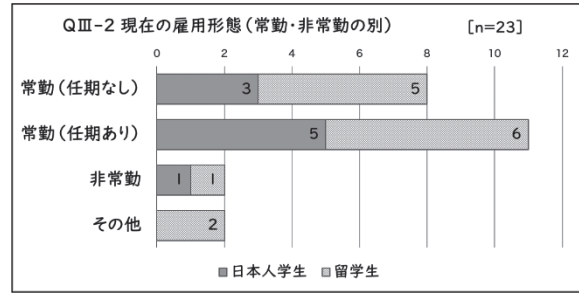


図 16 現在の雇用形態

#### 4.3.2 キャリア形成における本コースの役割

まず、「修士号を取得したことで、自身のキャリアに何か影響があったか」という質問への回答結果を図 17 に示す。「転職の際、有利だった (13)」が最も多く、「給与等の待遇が良くなった (10)」「コーディネーターや主任など責任ある仕事を任されるようになった (7)」「専任になった (5)」「職位が上がった (4)」のような、職場での地位や待遇が良くなったという回答が多い。また、留学生を中心に、「研究発表の場が増えた (5)」「博士課程への進学が可能になった (3)」という回答もあり、修士号獲得が修了生にとって研究面での可能性を広げるきっかけにもなっていることがうかがえる。

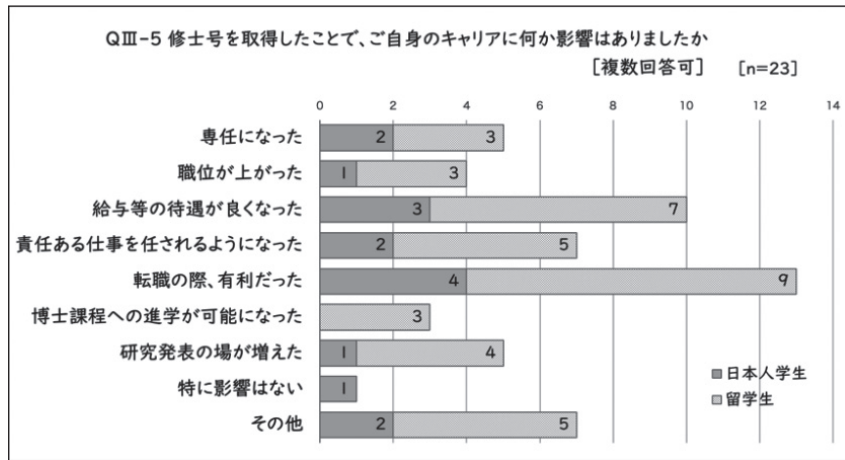


図 17 修士号取得のキャリアへの影響

次に、「本学のリカレントコースで学んで良かったか」という問いに対して、「強く思う (22)」「まあ思う (1)」と、修了生全員が肯定的に振り返っている（図 18）。理由としては、「日本語教育の知識や能力を高めることができた」「日本語教師として成長できた」「留学経験により仕事の範囲が広がった」といった自己成長に関する回答のほか、「かけがえのない素晴らしい同期に会えた」「いい仲間に出会い、日本語教師として学ぶことが多かった」「リカレント生は現職者で、同じ立場で意見交換や考えを共

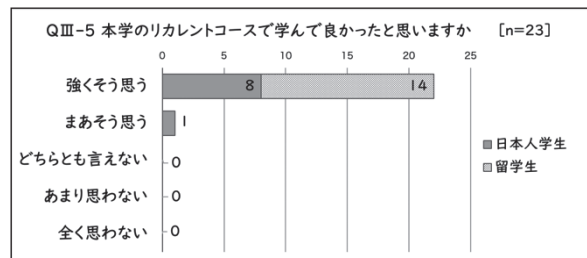


図 18 本コースでの学びについて

有できた」といった現職者同士の協働の学びやつながりに関する回答が多かった。

最後に、「自身のキャリア形成において、リカレントコースはどのような意味を持っているか(QⅢ-10)」については、「仕事の選択肢が広がった」「キャリアを考えるきっかけとなった」「さらに研究を進め、世界の日本語教育に寄与したいと考えるようになった」といった自身のキャリアを考えるきっかけや実際のキャリア選択につながったという回答が多かった。また、「個人としての成長を感じ、新たな道を拓いてくれた」「リカレントコースで得た知識、仲間のおかげで、これからは教師として成長できる気がする」「日本語教師としての自信がついた」「仕事をしていく上で、この経験と自信が支えてくれると思う」といった自己成長や教師としての自信につながったという回答も多かった。

以上、調査結果の概要を報告した。次節では、上述の調査結果に加え、詳細を扱えなかった自由記述欄での記述内容をもとに、キャリア形成における日本語教育リカレントコースの意義と課題について考察を行う。

## 5. キャリア形成における日本語教育リカレントコースの意義・課題

第4節における修了生を対象とした追跡調査結果をもとに、本節ではキャリア形成における日本語教育リカレントコースの意義として、以下の5点について考察を行う。

- ① 研究に関する知識の獲得
- ② 日本語教育に関する専門知識と実践能力の向上
- ③ 現職者同士の協働の学び
- ④ 修士号取得によるキャリアアップやキャリア選択の可能性の広がり
- ⑤ 1年制であることのメリット

また、同様に、本コースの抱える課題として、以下の3点について考察する。

- ① 博士課程への進学を視野に入れた教育
- ② 修了後のネットワークの構築・強化
- ③ 経済的支援の安定的確保

### 5.1 キャリア形成における本コースの意義

#### 5.1.1 研究に関する知識の獲得

本コースの意義として、まず、研究手法・分析手法など研究面での学びが挙げられる。「リカレントコースで学んで良かったと思うか」の自由記述欄にも、「とても大変だったが、研究のことが前より詳しくわかるようになった」「日本語教育分野における研究の知識が増え、自分をよりよく磨くことができた」といった、研究面で多くの学びがあったことを示唆するコメントが多かった。図7に見るように、出願前の心配ごとや志望理由において、研究の知識や能力に対する多くの不安が述べられていたが、リカレントコースで学ぶことによってその不安が解消され、現在の自信につながったのではないかと考えられる。

こうした知識の獲得には、もちろん履修科目の授業や主指導教員のゼミによるところが大きいですが、リカレント生のゼミである「発信日本語演習」が果たしている役割も大きいと思われる。発信日本語演習では、修士論文の進捗管理はもちろんだが、研究方法や分析方法などを共有しながら、複数のリカレント担当教員から多角的なフィードバックを受けることができる。加えて、教

員だけではなく、学生同士でもお互いの研究に関して助言やコメントをし合ったりすることが多く、そこから得られる学びも多いと考えられる。実際、修了生のほぼ全員がこの授業を履修して良かったと回答している(図 11)。1年という短期間でこれまで全員が質の高い修士論文を書き上げてきたことを考えると、履修科目の授業に加え、主指導教員のゼミとリカレント生のゼミの両輪がうまく回ることで、研究面での学びを促進していると考えられる。

### 5.1.2 日本語教育に関する専門知識と実践能力の向上

4.1.4 の志望理由にもあるように、リカレント生の多くが日本語教育の現場において知識、能力不足を感じ、学び直しとスキルの向上を目指して、本コースを志望している。一方、修了後における日本語教育の知識や能力の変化に関するアンケート記述を概観すると、「1年の短期集中で専門領域を学べた」「自身の日本語教育に関する知識を高めることができた」「日本語教育を修了したことで専門性のある知識を得られ、自信がついた」など、本コースを修了したことで、多くのリカレント生が専門知識や実践能力の向上を感じていることがわかった。

また、結果の概要では触れなかったが、「本学で履修した授業で、自身の仕事に役立っているものはあるか(QⅢ-7)」という質問に対しては、「『教材開発』『心理学』『会話分析』『フィードバック研究』『評価法』など、履修した授業全てが仕事に役立っていると思う」「『日本語教育実践研究』『日本語教育学研究』の授業で学んだ知識は、外国人向けの E-learning コンテンツ、やさしい日本語の教材制作の仕事に役立っている」のように、多くの修了生が履修した科目名や授業内容を挙げながら、どのような点が現在の仕事に役立っているかについて具体的に回答している。これはリカレント生が現職者であることに起因していると考えられる。リカレント生は、教育の経験も豊富で、通常の授業であっても現場を考慮に入れた実用的な視点を持って授業を受けているケースが多く、本コースでの学びを教育実践や仕事に応用できる力を備えていると言える。

さらに、実践能力の向上に関しては、インターンシップの履修も重要な役割を果たしていると考えられる(図 12)。現職者であるリカレント生は、自身の経験や現場と比較しながら授業に参加することができるため、インターンシップを通して教師としての視野を広げることができる。加えて、修了後に研修で学んだことをすぐに実践できる環境にあることも要因の1つであると考えられる。自由記述欄でも、「大学で行われている日本語の授業をしっかりと見学・参加でき、非常に多くの実践的なことを学ばせてもらった」「留学生への日本語教育を見学することができ、自身の実践の場(地域)と比較しながら学ぶことができた」「インターンシップで授業見学させていただいたことは、現在の仕事にも活かされている」などのコメントが見られ、インターンシップを通して多くを学び、実際に学んだ内容が現場での教育に活かされていることがわかる。

### 5.1.3 現職者同士の協働の学び

リカレント生は国籍、年齢、教育経験も多様だが、全員が現職者である。「リカレントコースの意義や良さは何か」(QⅢ-8)という質問に対する「実際に現場での経験があるからこそ『学び』が非常に多くある点、現職の同期がいることでそれぞれの経験を教え合うことができる点、修了後も相談し合える仲間ができる点がリカレントコースの良さだと思う」「リカレントコース生は教育機関で現職の教師であり、同じ立場で意見交換や考えを共有することができた。互いに1年しかないという緊張感を持って授業や論文執筆に取り組めたことが、逆によかった」といった

回答に代表されるように、互いを現職者として尊重し合いながら、協力的かつ協働的に学びを進めていったことがわかる。リカレント生は先述した発信日本語演習以外にも共通して履修する科目が複数あることが多く、1年という短期間でありながらも、互いに支え合い、学び合うことにより、深い関係性を構築することができる。そのため、コース修了後も同期生でつながりを維持しているケースが多い。

#### 5.1.4 修士号取得によるキャリアアップやキャリア選択の可能性の広がり

4.1.4の報告にあるように、リカレント生の多くがキャリアアップを志望理由に挙げている。事実、「応募可能な日本語教育関連の仕事の選択肢が広がり、自身のキャリア形成にも大きな意味を持っている」「リカレントコースの修了により様々な新たな道が開け、私のキャリアにおいて非常に重要な要素となっている」「修士号なしに、今のポジションにつける可能性はなかった」などのコメントにあるように、本コースを修了し、修士号を取得することが修了生のキャリア形成に大きく寄与していることがわかる。また、転職における資格としての修士号の有用性や現職における待遇面の向上などが報告されていることから（図17）、修士号の取得が様々な面でキャリアアップに貢献していることがわかる。

#### 5.1.5 1年制であることのメリット

最後に挙げられるのは、1年という短期間で修士号が取得できる点である。これも志望理由の1つとして多くの修了生が重視している点である。4.1.4で報告されているように、短期間で集中的に学ぶことで、研究や日本語教育に関する知識や能力が向上でき、修士号を取得したうえで職場に復帰できるのは、現職の教員であるリカレント生にとっては大きなメリットだと思われる。「リカレントコースの意義や良さは何か」（QⅢ-8）の自由記述欄でも、「現職の日本語教師が1年で修了できるので、休職のしやすさがあるのが良い」「1年間で集中して学べ、学位も取れること。モチベーションが高い同期や同級生と出会えること」「1年で修士を取るのも、時間をきちんと管理して勉強や研究にはしっかりと集中しないといけないという点良かった」といった1年制であることが休職のしやすさという面だけでなく、学習意欲や学習態度の面においてもプラスに働いていることがわかる。

また、4.1.5で見たように、家庭の事情等で海外である日本に長期滞在をすることが難しい場合や、生活費の工面など経済面での負担を考えると、1年制であることのメリットは大きいと考えられる。

## 5.2 本コースの課題

### 5.2.1 博士課程への進学を視野に入れた教育

4.1.5にあるように、留学生を中心に、出願時点で4割以上のリカレント生が将来的に博士課程への進学を検討していたことが明らかになった（図6）。しかし、リカレント生は現職者であるため、修了後に教育の現場に復帰することがほとんどであり、現時点では、本コース修了後すぐに博士課程へ進学した修了生がいないのが現状である。その一方で、アンケート内で博士後期課程に関するコメントを概観すると、「修論を書き上げた後、もう少し研究を深めたい気持ちにもなり、博士後期課程に関心も持ったが、どのような道筋があるのかわからなかったのも、そうした

説明もあると良いと思う」「修士を取ったものの、(現職には)任期があり、次は博士を取らないと先はなかなか厳しい」など、在学中や修了後に進学を考えていた修了生がいることがわかる。こうした希望を持ったリカレント生のために、博士課程への進学がキャリアを考えるうえでの1つの選択肢となるよう、在学中から将来的な進学の可能性を見据えた進路指導や研究指導を行っていくなどの対応が考えられる。

### 5.2.2 修了後のネットワークの構築・強化

リカレントコースは1年制であるため、先輩、後輩が同時期に在籍することがない。そのため、5.1.3で述べたように、修了年度ごとに横のつながりはあるものの、年度の異なる修了生同士をつなげるようなネットワークが機能しているとは言い難い。今後は、修了年度を超えた縦のつながりを含む修了生の新しいネットワークの形成と強化が課題となるであろう。また、そうしたネットワークが形成されることで、修了生同士の勉強会や共同研究の実施、シンポジウムなどの企画・開催など、修了生の輪が広がっていくことが期待される。

### 5.2.3 経済的支援の安定的確保

図7で示されているように、「出願にあたっての心配ごと・悩み」(QI-16)において、リカレント生の6割以上が奨学金等の経済的支援、また、4割以上が生活費の工面を挙げている。リカレント生は在職のまま入学するケースもあるが、多くが休職、または離職をして入学することも明らかになっている(図8)。特に、海外の現職者にとっては、学費や生活費といった経済的負担が大きいと考えられる。留学生の場合、これまで、35歳以下という年齢制限はあるものの、申請があれば、スーパーグローバル大学創成支援事業(SGU)<sup>14</sup>による国費奨学金が給付されてきた。しかし、本事業は2023年度で終了するため、現時点で2024年度以降の奨学金については未定となっている。また、日本人リカレント生にとっても、現時点で利用できる奨学金制度や授業料免除制度がほぼない<sup>15</sup>ため、休職、または離職をした場合の経済的負担は留学生同様に大きくなっていると思われる。このような経済的な不安を解消し、安定的な定員の確保を実現するためには、留学生と日本人学生の双方に対し、奨学金の給付や授業料等の免除を行うなど、安定的かつ持続的な経済支援を行っていく必要があると思われる。

## 6. おわりに

本稿では、日本語教育リカレントコースの概要とこれまでの実績、さらに修了生を対象とした追跡調査の概要と調査結果の概要を報告し、キャリア形成という観点から本コースの意義と課題について考察を行った。その結果、本コースの意義として①研究に関する知識の獲得、②日本語教育に関する専門知識と実践能力の向上、③現職者同士の協働の学び、④修士号取得によるキャリアアップやキャリア選択の可能性の広がり、⑤1年制であることのメリット、という5つが抽出された。一方、本コースの抱える課題としては、①博士課程への進学を視野に入れた教育、②

<sup>14</sup> 本学は2014年度より文部科学省が実施している「スーパーグローバル大学創成支援事業 タイプB(グローバル化牽引型)」に採択されている。

<sup>15</sup> 2021年度より本学の授業料免除制度が変更され、2023年12月現在で、リカレント生(日本人学生・留学生)が申請可能な制度は「コロナ禍による家計急変者に対する授業料免除」のみとなっている。



修了後のネットワークの構築・強化、③経済的支援の安定的確保、という3つが挙げられた。これらの課題を受け止め、今後、リカレント生にとって、これまで以上に充実した1年間のプログラムとなるよう、コースとして具体的な対策を検討したい。

また、今回の調査では、アンケート調査を通して修了生の全体的な動向や傾向を明らかにすることができた。今後は、修了生が本コースにおいて、どのようにキャリア形成をしてきたのかについて、数名を対象にインタビュー調査を行い、質的分析によって、より深く一人ひとりのキャリア形成の様相を明らかにしていきたい。

(執筆分担：1・2・3・4 工藤、5・6 伊東)

## 謝辞

日本語教育リカレントコースの前コース長である藤村知子（本学名誉教授）には、本コース発足時のことについてご教示いただきました。また、本コースを開設するにあたり、国際交流基金日本語国際センターの日本語教育指導者養成プログラムの担当者の方々には有益なご助言をいただきました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。そして、今回の調査に快くご協力くださった修了生の皆さんにも感謝の意を表します。

## 参考文献

- 内山夕輝（2021）「日本に在住するブラジル人の日本語学習動機—母語での生活が可能な環境において—」  
東京外国語大学学術成果コレクション「推薦公開修士論文」  
<<https://tufs.repo.nii.ac.jp/records/912>> 2024年3月8日閲覧
- 近藤彩・木谷直之・木田真理（2012）「日本語教育指導者養成プログラムの10年の歩み—現職の非母語話者日本語教師の修了後の活動を踏まえて—」『日本語言語文化研究会論集』第8号，pp.1-27.
- 八田直美・菊岡由香（2020）「『特定課題研究』で取り上げられた海外の日本語教育の課題—日本語教育指導者養成プログラム（修士課程）18年間の成果—」『国際交流基金日本語教育紀要』第16号，pp.75-86.
- 文部科学省中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）平成23年1月31日」  
<[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)> 2023年11月8日閲覧

(くどう かなこ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)

(いとう かつひろ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 講師)

# **Significance and Challenges of Recurrent Course in Japanese Language Education from the Perspective of Career Development:**

## **Based on a Follow-up Survey of Graduates**

**KUDO Kanako, ITO Katsuhiko**

**KEYWORDS:** Recurrent Course in Japanese Language Education, Master's program, Current Japanese language teachers, Follow-up survey of graduates, Career development

The Recurrent Course in Japanese Language Education at Tokyo University of Foreign Studies is a program designed for current Japanese language teachers who would return to their home institutions and contribute to the development of Japanese language education after obtaining a master's degree through one year of study and research.

This paper provides an overview of the Recurrent Course in Japanese Language Education and its achievements to date, as well as a summary of the follow-up survey of graduates and its results. Additionally, it discusses the significance and challenges of the course from the perspective of career development.

A survey was conducted on all 24 graduates, and 23 responses were obtained. The questionnaire contains both multiple-choice and open-ended questions.

The results revealed that the course was significant for the following five reasons: 1) Acquisition of knowledge regarding research, 2) Improvement of expertise and practical skills in Japanese language education, 3) Collaboration and peer learning among current Japanese teachers, 4) Career development and expansion of career options through the obtaining of a master's degree, and 5) Length of the program (one year). On the other hand, the following three items were identified as challenges: 1) Lack of information about possibilities of continuing to PhD, 2) Necessity for strengthening networks of graduates, and 3) Lack of stable financial support for graduate students.

The survey was able to identify the overall views of graduates from a quantitative perspective. For further research, it is essential to conduct interviews with several graduates to find out how this course has helped them further develop their careers. Through qualitative analysis of such interviews, we expect to clarify various aspects of individual career development.